球児待望の初施設

大府市民球場、誕生

昨年12月、大府市民球場のプレオープンセレモニーが開かれた。岡村秀人大府市長をはじめ関係者や地元の球児など約130名が出席した。大府高校野球部による小学生対象の野球教室はある想いが秘められていた。その想いや、球場の情報を当日の様子とともにレポート。

文・写真◉水谷 豊

センター最後方まで122・4メートル、両翼は97・5メートルという広さ。内野は黒土、外野はきれいな天然芝。十分な投球練習場や室内練習場、さらには広々としたサブグラウンドも備えているこの施設は、三菱重工名古屋と三菱自動車岡崎という社会人強豪硬式野球部の活動拠点だった。今回、部の再編や活動拠点の移転があったことから大府市がこの施設を譲り受けた。市長はじめ多くの関係者の尽力で大府市待望の市民球場が誕生することとなった。現在、検討委員会を立ち上げ、より多くの人々が快適に利用できるよう整備をしている。

プレオープンとなったこの日、大府高校野球部による地元小学生への野球教室も開催された。感染症対策から対象は6年生のみで人数制限もされたが、広く整った球場で貴重な体験となった。野球教室では全体でウォーミングアップとキャッチボール指導の後、各ポジションにわかれての守備講座と打撃講座が設けられた。大府高校の監督とコーチ、そして選手がわかりやすくそして楽しめる指導をしていた。

セレモニーでテープカットをする岡村市長(中)ら

この野球教室では少し珍しいことがあった。それは全体3分の1の時間を「グラウンド整備」の講座としていたことだ。これは事前に小学生たちの所属先であるスポーツ少年団からのリクエストだった。

昨今、少子化による所属人数の減少や、感染症対策も含む1回あたりの活動時間の縮小により、どうしても準備や片付けに保護者の力を添えてもらうことが多くなっているという。その結果、子供たちがグラウンド整備をする機会が減っているのだ。なかには、高校生になってはじめてきちんとしたグラウンド整備をする球児もいるという。

「本来、自分で使ったものを片付けたりきれいにしたりするのは当たり前のこと。どうしても保護者のみなさんに助けてもらわなければならないのですが、今日をキッカケに子供たちがなにかに気づき、学んでくれたら嬉しいですね。自ら整備をすることでグラウンドへの愛着もわくと思います」

今回のリクエストを実現させた市議会議長の早川高光議員はそう話した。早川議員も長年大府市内のスポーツ少年団で野球の指導をしてきたため、技術よりも大切なことがあるということを子供たちへ伝えたいという想いがあったのだ。

小学生たちは水を使ったりレーキとトンボを使い分けたりしながら整備をすることに驚いていた。また、実際に整備をしながら「うまくできない」や「たいへん」など、難しさを口にしたり全身を使った後に脱力したりとグラウンド整備の奥深さを体験していた。

大東スポーツ少年団の子供たちは「楽しかった」と口をそろえ、ほかにも「バッティングのタイミングのとりかたを教えてもらったけどわかりやすかった」「整備のやりかたを初めて聞いた。ちゃんとやろうと思う」「今日教えてもらったことは全部いかしたい。今日から頑張る」と興奮ぎみに伝えてくれた。

大府高校の大脇蓮司（1年）は大東スポーツ少年団の出身。感想を聞くと次のように答えてくれた。

「小学生に教えることは難しかったです。ずっと目を合わせて聞いてくれる姿が印象的でした。また、卒団してから初めてチームの皆さんにお会いしたのですが、僕のことをずっと覚えていてくれたこと、応援してくださっていたことを今日お話しした際に知りました。このような機会があったからいろいろ知ったり感じたりすることができました。感謝でいっぱいです」

他にも大府高校には何人もの地元チーム出身者がいる。共和スポーツ少年団出身の徳永心瑠（2年）は「自分が人に指導をするということは難しさがありましたが、楽しんでくれていたのでホッとしました。また、小学生たちの姿を見ていたら初心にかえることができました」と話した。

大府市民球場で子供たちがはつらつとプレーする姿をみることが楽しみだ。そしてここから高校、大学、社会人、プロ、さらには世界で活躍する選手があらわれてほしいと期待が膨らむ。それほど大府市民球場の誕生は夢と希望がつまっているのだ。

大府高校野球部による野球教室はポジションにわかれ広い球場をいっぱいに使い基礎基本を中心にレベルアップのコツなどを指導。さらに、道具を使い分けながら丁寧に行う整備のレクチャーは小学生に新たな学びをあたえた

この日は感染症対策もあり地元6年生に限定されたが多くの球児が参加した。少子化で球児の減少もあるがこれからまた大府の野球が盛り上がってほしい